繪本自來也説話

後編

五

へ遠13
1.9.10
11止

13
門
帙
巻

報仇奇談 自來也說話後編 巻之五

武江　感和亭鬼武著

石堂之息女玉琴奇病併自来也丁石堂家入込条

自来也の小唄夢芽八仁木の家隷と詐り結内のあさを
とり持せ石堂家へ入込ゐるまで盗賊とハちらぢ欠良懇ゐるあそ
小賊共ゐ意を跟く館の動静を窺ゐるふ此程息女玉琴
半点病氣の由聞ふわゞ特と仁木家より ゐ婚姻の日を
ゐゐと急ぐ乃諏を述立帰り自来也ふ斯とゐゐ琴ぬ病
自来也欣躍夫ふつゐく予一計ありとなゐも石堂家れ
動静を窺ゐる去ゐるふ石堂家ゐゐくハ仁木家より

婚姻とり急ぐ越すれば一日も老早玉琴の病氣平愈あらんを願ふ處ふ恠哉頃日ハ息女玉琴乃象いりと邪く二個ふるり飲食坐臥倶ふ差へらとなく何れも実の玉琴なるを不分醫術祈禱手を尽せども験なく捧余にとり犬ふ入るる小賊より自来也へ岩知えべれバ仕弥しきりと歌之助を近跟這回ハ汝を用るの期至れば予ふ従ひ如斯くせよと謀を示し折をうかゝ處ふ石堂家ふくハ玉琴の吳病ふ驚き名僧名醫を捜し求め當時鎌倉雪の下ハ遠りある嚴妙院とゝ法修験こそ斯る祈禱ふ妙あり と聞へられハ太早使者を走せ招請ある支疾も自来也別取く其路程ふ歌之助諸共立出待こうも不知那終験者嚴妙院ハ石堂家より急の使者ふ乞せ疾夜ふ入しゝ轎まゝ来うる傍の萩陰より挑灯のとゝ焔の九ゝ三三連び出轎の道を回るとゝ乃へ乃ほゞ其中より色青ゝ光ゝる男女の容象二個顕れ我ゝを祐ふくと呼ふ来るぞ轎を如ゝ従者ども大ふ驚ふ轎を捨蚤逃出せで嚴妙院も這を看て擦振ふゞゝ珠数おしゝもみ真言を唱へ祈念なゝせバ二個の幽霊ある苦しやといゝる左右

自来也
劫簾験
之圖

より嚴妓院ふ必至と拘跟をぐれば呼と計ふ嚴
妓院ハ氣絶做しゝる其もの面ふ那燭も幽霊を
忽ち何地へか消失あるり不人もあらされば自未
也歌之助倶ふ木紙より立出嚴妓院の著類を
剥取自未也ハ行足を擡て當一踏ふ嚴妓院を
踏殺しゝ死骸ハ傷の莢くらゐ歌之助と低言
合石堂の館をさしく急行皆是自未也の天術
にて怪しゝれ儀且石堂家あらゝハ息女玉琴姫
病ふ犯ふ醫術の驗もあらざるゆへ依嚴妓院を
憑遣せば老早来よゝと待處へ嚴妓院と披露させ

呼ふ到る自未也ハ彼驗の躰ふ身を変ゝ歌之助を示勵
と做しゝく迚連入まれば夫ゝの吏職立出扶樣あつく
后奥深く招ゝありし動静を説話ふ身の行法をもて
那天病を退けゝれとあらゆる自未也ハ得先
姫君の容躰を窺ひ申さんとて奥へ斯くと通しゝる
あや侍女ども多く自未也を案内做しゝ郊の森
所へ伴ひ次の間ふ招くある変へ万里野破亡之助の妻
環立出玉琴の天病の動静を語り居間の屏風を迚退れ
ハいと美麗なる息女二個同ゝ象あく褥へ上ふ坐ゝ
ふと自未也得尺届幣帛押立珠数おゝ揉摧しゝ

祷祈念あり〜て后手を叩を結び口を呪文を唱へば今迄
二個ありてる玉琴のあを懼〜と呼びて一個の衆
消失てしまへば環を始終意を跟此光景を親くあるを
自来也いへ〜〜今一個の容象失てりといへども今宵
の中ハ某這所館を停りあるとでいるを寛来て侍の
不苦ハ侍次を成とし今宵某直宿做〜なるとも祈念
不怠を明日より姫君の美病平愈疑ひあるべうとて
みで環いえ〜〜実も妖ある貴僧の行力を以て忽験を
看ほとも尚今宵ハ鈴を停祈念を憑まを〜せん去
耶ば此處ハ婦人のくるとを表の大坐を扣へ玉へり
支あ〜バとれへ扱さヤさんと僕侍女の案内あく別間へ
誘せるく餐應あり〜る處へ當家の長〜る万里野破广
之助保義立出対面做〜始て見糸の礼を伸て后熟
面躰を観るを玉を眼ハ不見定ども覚あるを顔を
意を收老先寛く休息あれと扶投な〜きる破广助
紅窩不一物假粧ことのと推量〜てぞ奥を入る此を朝妻
歌を助ハ小厠と糸て自来也と測を入迷小房室をありて
退屈のあまり大坐の中を其所此所と見巡る容象を
爰く乃女中直越を姦を看て顔色醜美成の風俗否身
なるを於笑想ひ嘲咲を歌を助ハ已を為あるあんと

歌こ妖者
を一くすべ
唐魂畫

樣眼を流目ふ〜〜く色情を含こる美態と女共小手招
〜〜どせるふ浮れ歌之助ハ椽端ふ足爪立く延上りゝやる
柏子ふ高圧椽板踏外〜〜廣庭へ轉び陷るとく柱ふ頭を
打眼醫解く大童の象とあるとゝ衆皆絶倒〜て逃入るゝぞ
歌之助も是面目やありゝん頭を抱へく元の小房室へ走
歸るを自来也も大坐ふあり〜遥ふ此躰を看やりまゝく
のゝ落魂尽をとゝと苦吠〜てありゝる處へ吏職立替入
替食應あり姫の奇病も貴僧の行力ふく疾快方の動静と
〜へ待れバなをも今霄ハ直宿憑ナよ〜ふて夜更るまゝ疑侍
權く穩ふ〜と衆皆大坐を延取〜跡ふを自来也密

一個前後を見廻〜時刻を考ふるふ疾三更の時計の
救館も静ふ人〜も森入端ふ折こそよりれど暗ふ
携へる腰劔取出〜頭巾衣を脱捨る肌ふハ着込小手
脚當奥を眼撫く立上り大願成就の期至れりと一個
笑〜く晴昨の森處を志〜差足抜足忍入る動静ふ
窺ふ破亢之助相圖の呼ふ吹掃せバ妻の環ハ襁袴巻
身軽の出立雑刀小脇ふ抱込ぐ姫の寐所を立出るを
破亢之助低言〜い〜〜〜く先刻申同せ〜ぐく今霄八込
修験者こて各員ふ盗賊自来也ふれバ預ふふ俸ひ擒
ふ做んと口〜ハ力士を砂く取囲ハ虫の扒出る處也ふ〜汝

姫君の寓處を固免夜あ〜べ相圖せよ予ハ這よ〜君の
寓所を直宿せんと奥の殿へと急行

自来也寂期併自来石由来条

尚更渡る夜半の風廣庭前の池の邊ふ連く音を鳴敢
の蛙いと寂莫やり水の流を堰〜る樋の口より生首喰〜
血刀提顕れ出る盗賊自来也、個言〜て天を仰ぎ右E
三好長慈公過ける頃三浦岬の上ふくち憑あり石堂
晴明の死役書今霊魂ふ俤奇る是ふく意恨を晴ふへ某
迚も兼てより石堂家ふ仇を做〜三好家の耻辱を雪ひ
ちいらせんと偖社這迫盗賊の悪行を挙動〜ふ軍開

の金を調へ石堂と一軍ふ及ぶやと乙掛侍ハ〜ふ習ひ学ん
〜恐術ふく不討今宵晴明の生首得〜る歓〜き大願
成就乙地よ〜と天ふも上る勇の勢ひ何の間ふろハ破亡
之助の差圖ふ取巻詩多の組子挑灯松明白日のもく秋
猟雷んと取跟を神変奇術の自来也ふ切立〜れ〜〜意
退き乗道具ふて歩止んと弓鳥銃の矢玉を楯へ十ども
射もども所持做〜る西天竺の奇特ふく身ふ〜り
矢玉もあ〜ざるうち唱ふる呪文ふ自来也の象ハ失〜へ
ざれバ捕逃さ〜じと組ふ共其所よ迚所よと廣庭を尚
奥深く尋行後より亦も顕る〜自来也口ふ呪文を唱ハ

印を結びて指拂けば不審や勇侶吉郎は處へ走来り
累ね弓を咏むのと覺るゆへ爰地のごとくまうりしあり
如何する哀の侍ふと大息継ぎ歎くと自来也いへらく
弓年来の怨み叫べ石堂晴昧を討取れば今は某れ
故足ねるようくん絡せしと西天竺を今こそ汝あらる
べくこれより速ふ帰國ゐるべし椎津家へ返しまいらせ
世動急る哀ゐれ弓は奇術を以て身を躲せ其身
あらんと氣遣ゐし汝を敵地を疾立去と西天竺を
手渡し做し急れ正輝疾行とせさ立言ふ侶吉も
四坊ゐ怨殘まども西天竺も大切と別れてこそ出ず

行斯る折から一間の中より大音上盗賊の首領尾形周馬
寛行吳名ハ自来也去る頃越後の國妙香山ふるく出逢ふ
者る万里野破广之助保義改て見糸せんと小昊疑り
身を固先兵戎天より投ゝ石螺携へ立出れば
自来也万里埜を急度觀るいうも霄ふ見糸の
砌より見覚へある面鯖主を討れ流浪の汝等
今よりハ弓ゐ小嘍喽と做く得させんそと黄言例く
破广之助呵ゝと手咲愚や寛行汝兼てより三好家の
旧恩を思ひ主人を覬著と知つる故老早より大ふ
跟是ゝる朝妻歌ゝ助と名乗ゝ落魂こそ當家の力士

自來也擊
假真首而
出樋口圖

其二

と嘯れる荒山隈五郎時綱と不紹や復主人晴眠と公得て
討取る若冠社汝が三浦の海上あらく出逢あらる吾川
糸男といへりの當家の不奥を家りろ〻山訳不立
と切服做しまる亡骸を主人晴眠の寐所ふ入替汝ふ
討せく糸男小一の功も省立悪徒あぐるも汝も復忠
義ふ懲らっ魂を安情討取んも武士の幸意ふあら
ざるべ主人の身替糸男の首を渡せしも汝が義公を
感せ〻但ふ情の計ひぞや晋の豫讓の例を想ひ
怨を晴し尋常ふ素様まとと嘯ふれば自来也
怒の歯怒を做し計るぐと思ひしふ謀れし

残念や此上ハ早奇術を以く館の奴原鏖と唱ふる
呪文ふ風吹起り峡雲霞ひ雲中より救夛の騎馬
武者得物を延提破亢之助目掛去掛る折ふ跪出ふ
歌之助大童ふ鉾巻締小手拭當ふ着迄做し始の
落魂延替く勇士の相貌太刀抜かざ〻荒山隈五郎
時綱這ふあり天魔の変化何程の夏あらんと兵形
の物ふ討つる破亢之助此時と一公ふ金亀山兵純兵と
祈念る〻那石螺を吹鑵ハ実や遠音ふ響渡り不
思儀や救夛の蛇ふ〻つれ異形の武者ふ扮掛まば
象ま変し〻木の葉とあり四方へ散く消失くり自

来也焦燥呪文をとなへ印を結べと這者如何術力尽て
験しなし破亡く助手咲ひ寂早不叶尾形周馬汝が行ふ
蝦蟆の幻術辨財天の加護ふたり術尽ぬれば詮なく
邪く一幸立の盗賊自来也者共楽を組捕と言の下
より殺爰の組子追〻ハせ〻と捉搦ことを丟跟蹤殺切散し
這迫んと自来也ハ腰刻逆手ふ我腹へぐさと突立延
回し一息継く破亡く助ふ望ひ早古主の旧恩を思ひ
當家ふ恨を報んと年日の願ひ〻〻ふ時狐ふ
玉琴姫の婚姻僥倖ひと小賊を入込せ其上ふ早夫
術をなく姫の象を二個と做し且後験者と詐て

吳病を退け透を窺晴を撃取しと思ふ差ふ計畧
の綱ふ搦り剝へ石螺の奇特ふ早ふ夫術の奏わるも
這迫倒し悪行の報ひせ〻〻ハ他手ふ搦るふしと
兼くの願此生害さり邪ぐら夫術を考へとも我
一念の術をなく象ハ此侵後世ふ残さべし寂朝の
程を看ようやとて腰剣抜取喰ふ當吮めくさりを掻切
ふぞ首討取んと隈立亭傍ふ立寄バ一程の赤氣
煙くと立上り眼霞く跟蹤うち割馬の象ハ煙りの
ごとく消失く残るハ一の石の像人の如くふ立ちるハ
不審或る光景あり破亡之助感歎るし悪人ふぐら

も義心の自来也意今楽が寂期の言ふ差あく一の
ちらし を残せしを前代未聞の賊徒ゆ首領
其石こそ生ふ自来石と号べしと言ふ
今も鎌倉の扇ヶ谷の自来石固縁なりと称ふ也
なりは

荒山隈五郎捕賊徒 併 勇侶吉郎天眼坊等

自来也後吊条

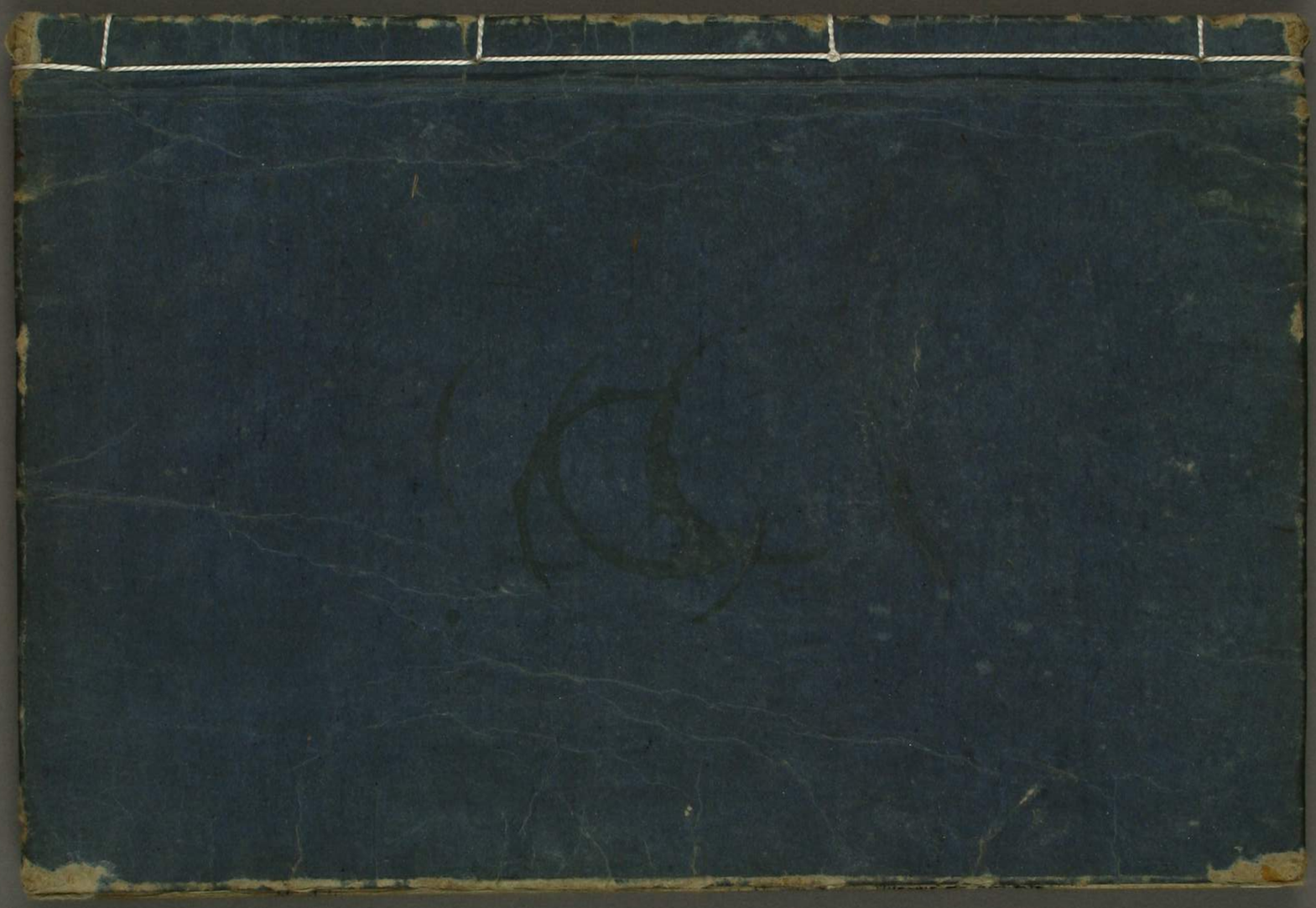
斯くさしも名を得し盗賊自来也亡失しうん残るふ
賊捕捕んと方里野破亡く助の差圖を更案内知り
去る荒山隈五郎時綱組ふ延連上総国相模国の遠ふ

徘徊做に自来也の小嘍喂共の左所を金義一勇を
揮く残ふく捕捕鎌倉へ延連来る折ふ三浦岬ふ
立寄滾島金吾ふ逢て吾川宋男の寂期の動静を
詳り復去りしこ浪蛟の洞八ふ金子を奪れんとして
難ふ逢し時金吾を救ひ浪士も吊ありと説話
来置の代し衣の後吊ひ得させと金五拾両ふのもて
後為金吾も大ふ歎ち且隈五郎の志を歓び逗ふ盤
打切く墨の衣ふ身を変じ宋男汀代く衣の菩提の
半を田園修行ふ出しとて佐亦自来也亡し変
佐国小関へ侍れば勇沼吉郎妻の義鳥の後とも

自来石之圖

大に歎き悲しび追薦供養不怠天眼坊も這を聞
繰倉に到り傳手を求く那自身石を伏拝但流し
面向做し其后此邊に引移て尚も年回の仏事執行ひ
る程勇伝吉郎より金を出し一の庵室を建立し
天眼坊を庵主とし〻く自来也の後嗣にぞ吊ひるゝれば
荒山隈五郎盜賊共を殘らず捕送り罪に行ひ伝れば
世上稱に旅行人民門戸の鎖を忘れ静謐の御代と欣悦
るゝ迄そ目出〻〻れ

自来也説話後遍巻之五大尾

和漢
西洋書籍賣捌處

大阪心齋橋博勞町角
群玉堂河内屋
岡田茂兵衛